

目 次

凡例

序にかえて——『源氏物語』の読み解きに向けて——

一 『源氏物語』の言葉を読むということ

1

二 若紫巻・「寄る波の」歌の解釈をめぐって

6

おわりに

15

I 歌の心と言葉

第一章 光源氏と空蟬の和歌贈答場面から

——「寝る夜なれば」・「益田は、まことになむ」考——

はじめに

一 光源氏から空蟬へ・「寝る夜なれば」

23

二 空蟬から光源氏へ・「益田は、まことになむ」

27

三 光源氏から空蟬へ	32
おわりに	35
第二章 六条の御息所の歌言葉——「山の井の水も」とわりに「考」——	39
はじめに	39
一 歌の言葉「山の井の水」	39
二 「山の井の水」に込められた思い	43
おわりに	45
第三章 「文付け枝」という情報——「吹き乱れた刈萱」と「菊の氣色ばめる枝」の場合——	49
はじめに	49
一 夕霧が用いた「吹き乱れた刈萱」	49
二 歌語「刈萱」	51
三 六条の御息所が用いた「菊の氣色ばめる枝」	56
四 文付け枝に託した心	58
おわりに——文付け枝に託された情報	62
第四章 夕顔巻の和歌・「心當てに」歌をめぐつて——〈不正解〉を導く方法	69
はじめに	69
一 光源氏の立場から	72
二 〈正解〉が〈不正解〉に転じるとき	78
三 常夏の女・夕顔の〈真実〉を探る	81
おわりに——解けてはならない〈謎〉ということ——	86
第五章 朝顔巻の光源氏と紫の上——歌言葉としての「石間の水」、「鴛鴦」をめぐつて——	95
はじめに	95
一 紫の上の和歌	96
二 光源氏の和歌の問題点	104
三 鴛鴦の歌の系譜	106
四 『源氏物語』の鴛鴦	112
五 朝顔巻の鴛鴦	113
おわりに	117

第一章 朝顔の姫君の物語——長編化への方法を探つて——	はじめに
一 葵卷の朝顔の姫君	125
1 呼び起こされた式部卿の宮の姫君	129
2 朝顔の姫君の和歌	132
二 朝顔卷から少女卷へ	135
1 「つれづれ」の朝顔の姫君	137
2 変化する光源氏の思い	142
三 梅枝卷の朝顔の姫君	144
1 散り過ぎたる梅の枝	144
2 朝顔の姫君の和歌	149
3 光源氏の和歌	151
おわりに	156
第二章 夕顔をめぐる物語の方法——情報の伝達者・惟光、そして右近——	163
はじめに	163
第三章 末摘花卷の言葉——「ねたし」と「いとほし」を中心にはじめに	189
一 惟光の働き	164
二 右近の働き	172
おわりに	182
第四章 葵卷・六条の御息所の魂の言葉——寂しさの表出として——	208
はじめに	215
一 生靈顯現の場の設定	215
二 生靈の言葉	217
三 生靈の歌の言葉	219
四 『蜻蛉日記』の「下交ひの棲」	222

五 寂しさの表出

おわりに

第五章 「死と救済」について考える——葵の上の死をめぐつて——

はじめに

一 葵の上の死

二 「悲しき」とに事を添へて」の解釈

三 死者の救済／生者の救済

おわりに

第六章 父としての光源氏——明石の姫君の教育をめぐつて——

はじめに

一 蛹巻の物語論の場面から

二 蛹巻の〈教育論〉再考

三 姫君教育の「完成」、そしてその後

おわりに——若菜下巻における光源氏の明石の姫君評価——

第七章 紫の上の心と言葉——光源氏との対話場面から——

275

おわりに——若菜下巻における光源氏の明石の姫君評価——

はじめに

一 若紫巻の紫の上の返歌・「いかなる草のゆかりなるらむ」をめぐつて

二 玉鬘巻の紫の上の言葉・常陸の宮の「紙屋紙の草子（和歌髓脳）」をめぐつて

三 蛹巻の紫の上の言葉・『うつほ物語』のあて宮批判をめぐつて

おわりに

第八章 夕霧巻の「紫の上の述懐」再考

はじめに

一 「無言太子とか、小法師ばらのかなしきことにする昔の譬ひ」の解釈の再確認

二 「述懐」の内容の再点検

三 夕霧巻の「述懐」と蛢巻の〈教育論〉の類似、そして光源氏と紫の上の齟齬の様相

おわりに

第九章 末摘花巻の仏教的要素——維摩詰の沈黙との関わりを模索して——

はじめに

一 末摘花の「しじま」について

二 「見るしもなし」について

328

323

321

321

313

308

305

302

301

295

275

275

276

276

276

276

276

276

276

276

275

267

263

256

252

251

251

247

239

235

231

231

228

225

III 宇治十帖を読み解く

正編から続編へ

三 「人分き」について	332
おわりに	334
第一章 〈家〉の経営と女性——「匂宮三帖」を読む——	343
はじめに	343
一 夕霧右大臣の不安	347
1 ヒーローになれない夕霧	347
2 権力維持・補強システムとしての姫君たち	348
3 隠された夕霧の不安	347
二 紅梅大納言の野望と限界	352
1 紅梅大納言の野望	352
2 顔を見せない宮の御方	355
第二章 大君の〈結婚拒否〉への一試論	359
一 拒否することの意味・不变なることへの意思	359
はじめに	359
一 八の宮の遺戒と大君の意思	366
二 薫と大君の齟齬の様相	361
三 薫の企ての行方	366
四 中の君と匂宮の結婚、その実情	375
五 大君の心の深層	376
六 大君の死に向く心	382
おわりに	393
一 八の宮の遺戒と大君の意思	395
二 薫と大君の齟齬の様相	398
三 薫の企ての行方	400

第三章 大君の〈恋〉の物語——父を待ち続けた娘——	407
はじめに	408
一 鏡の中の大君	409
二 初めての贈答歌	410
三 大君の〈父恋〉	411
四 懸橋を渡つて来る男君	412
おわりに	413
第四章 夢に現れた八の宮をめぐつて	414
——大君を追いつめたもの、そして阿闍梨の「欲望」——	415
はじめに	416
一 中の君の夢	417
二 子を思う「靈」（守護靈／怨靈）	418
三 阿闍梨の夢語り	419
おわりに——法師の「惡靈」という視角——	420
第五章 薫論のために——独詠という快楽、あるいは「大君幻想」という呪縛——	421
はじめに	422
一 浮舟登場／薫が「見た」もの	423
二 浮舟登場／薫が「見なかつた」もの	424
三 「顔鳥」の歌	425
四 「形見」の袖の色	426
五 「見し人は」の歌	427
おわりに	428
第六章 浮舟の物語	429
浮舟の和歌・初期の贈答歌二首を読み解く	430
はじめに	431
一 「ひたぶるに」歌を読み解く	432
二 「つれづれ」の浮舟	433
三 「まだふりぬ」歌を読み解く	434
おわりに	435

第七章 浮舟の独詠歌——物語の終焉に向けて——

はじめに

一 浮舟の半生概観

二 「袖触れし」歌を読み解く

三 「尼衣」歌を読み解く

おわりに

第八章 『源氏物語』の僧侶像——横川の僧都の手紙をめぐつて——

はじめに

一 横川の僧都の「母思い」

二 横川の僧都の「欲望」

三 横川の僧都の迷い

四 横川の僧都の手紙

五 横川の僧都と浮舟の齟齬・二通の手紙の擦れ違いという仕組み

おわりに

終 章 『源氏物語』を読み継ぐために——教室の内から、教室の外から——

はじめに

一 「美しい」人の描かれ方・「美しくない」人の描かれ方をめぐつて

二 「罪」が軽いということ

おわりに

初出一覧

あとがき

主要語句索引

001 583 579

571 560 554 551
はじめに
一 「美しい」人の描かれ方・「美しくない」人の描かれ方をめぐつて
二 「罪」が軽いということ
おわりに

551 541 537 529 524 517 514 513 513 504 497 490 487 485 485

凡 例

引用は、特にことわらない限り以下に拠る。ただし、いざれも表記等を私に改めた（句読点の打ち方を改めたり、補助動詞を仮名に聞くなどした箇所がある）。

一、『源氏物語』の引用本文は、新日本古典文学大系『源氏物語』一～五（岩波書店）に拠り、卷名、卷数、頁数を記した。巻名や巻数等を省略した場合もある。巻名「匂兵部卿」は略称「匂宮」を用いた。

一、『紫式部日記』の引用は、新日本古典文学大系『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』（岩波書店）に拠る。

一、和歌の引用は、特に断らない場合は『新編国歌大観』（角川書店）に拠る。ただし、『万葉集』は、新編日本古典文学全集『万葉集』①～④（小学館）に拠る。

一、経典の引用は、『大正新脩大藏經』（大正新脩大藏經刊行会）に拠り、語彙の検索には『大正新脩大藏經テキストデータベース』（大藏經テキストデータベース委員会）を用いた。

一、その他の古典作品の引用は、各章末の注に明記した。

一、古注釈書の引用は、以下に拠る。

『河海抄』、『紫明抄』は、玉上琢弥『源氏物語評釈資料編 紫明抄・河海抄』（角川書店）、および『天理図書館善本叢書』、その他は『源氏物語古注集成』（桜楓社／おうふう）、『源氏物語古註釈叢刊』（武藏野書院）所

取の本文。『源氏物語玉の小櫛』は『本居宣長全集』第四巻（筑摩書房）に拠る。上記以外の場合は、各章末の注に明記した。

一、よく引用する近年の注釈書は以下のように、引用に際して略号を用いた。

『玉上評釈』 ॥ 『源氏物語評釈』 玉上琢弥（角川書店）

『旧全集』 ॥ 日本古典文学全集 『源氏物語』 一〇六（小学館）

『集成』 ॥ 新潮日本古典集成 『源氏物語』 一〇八（新潮社）

『新大系』 ॥ 新日本古典文学大系 『源氏物語』 一〇五（岩波書店）

『新全集』 ॥ 新編日本古典文学全集 『源氏物語』 ①～⑥（小学館）

『岩波文庫』 ॥ 『源氏物語』 一〇九（岩波書店）

一、各章末尾に、注として引用した論文を記す際、なるべく初出とその後に収められた著書の両方を上げるようになしたが、本書各章の初出論文との関係に鑑みて引用論文の初出のみを示した場合や、参照の便宜のため著書のほうを上げた場合もある。また、本書各章の初出時以降に発表された関連論文について言及していない場合がある。

序にかえて——『源氏物語』の読み解きに向けて——

一 『源氏物語』の言葉を読むということ

『源氏物語』は、それ以前の様々な文章の表現を取り入れつつ、その創造的な文学表現によつて、新しい作品世界を切り拓いた。独創的な発想と方法で描き出された作中人物たちの心と言葉からは、読み直す度に新鮮な魅力や新しい発見を見出せる。本書は、そのような『源氏物語』の物語文学としての諸相を読み解くために、これまでに行つた考察の中から、特に物語の「表現」に着目しての小文を選んでまとめたものである。

『源氏物語』を「表現」に着目して読み解くということであれば、どのような本文を読むのか、ということに無自覚であつてはなるまい。これまで、私は、同筆でも一揃いの伝本でもなく、さまざまに問題が指摘されていることを承知しつつ、大島本と言われている「本」（を校訂したテキスト）で読んできた。『源氏物語』には、現在知られているだけでもおよそ一五〇種の写本があるという。そのどれかは『源氏物語』ではなく、特定のどれかだけが『源氏物語』であるなどと選別することは不可能であるし、意味もないようと考える。大島本と言われる「本」も、それらの中の一つと考える。以下に、私自身がどのような姿勢で『源氏物語』と向き合ってきたのかということを（あくまで文学研究の立場から）記しておきたい。

現在、一般の人が（そして、たぶん『源氏物語』を文学研究の対象とする人の多くも）『源氏物語』の原文を読み、

何らかの情報を発信する場合には（私もそうであるが）、いわゆる青表紙本系と呼ばれる、藤原定家を経たと言わる本を中心に据えて校訂した活字本文（注釈書）を利用することが多くなわれている。⁽¹⁾

例えば、新編日本古典文学全集（小学館）、新日本古典文学大系（岩波書店）、角川ソフィア文庫、新版の岩波文庫といつたシリーズの『源氏物語』の注釈書である。この中で、新大系本（その文庫版も）は、底本の大島本（欠巻の「浮舟」は明融本）の本文を、原則としてなるべく校訂しないで用いるという方針⁽²⁾を採っている点に大きな特徴がある（本書での引用本文を基本的に『新大系』に拠った理由である）。新編全集本などでは、青表紙諸本によつて多く見られる表現・語彙を採用して、本文の校訂を行つてゐる。そういう方針での注釈書と新大系本とを読み比べてみると、底本が同じ大島本の巻であつても、当然ながら異なる表現となつてゐる箇所が出てくる（物語の大筋の理解に関わるほどの大きな違いが生じてゐる箇所は、そつと多くはないが）。

周知のとおり、『源氏物語』原作者の自筆本はおろか、鎌倉期以前の写本で全帖一揃いの『源氏物語』も存在は確認されていない。定家自筆本とされる本やその臨写本も確認できない巻があるという状況で、現存する写本から、作者の自筆本へとたどる道を見つけることはできない。第一、作者についても、近代小説の作者と同じような意味で、紫式部であると言つてよいものか、躊躇われる⁽³⁾。

文学史の授業などでもよく取り上げる『紫式部日記』の『源氏物語』関連の記述についても、紫式部という人が、「源氏の物語」という作り物語の作者として、本人の周辺で認知されていたということはわかるが、それ以上のこととは推測の域を出ない。『紫式部日記』を虚心に読めば、有名な左衛門督公任の発言「このわたりに、若紫やさぶらふ」の発言をもつても、現在私たちが『源氏物語』と認定している作品全体を紫式部が一人で執筆したかどうか確定できないし、その時点での巻まで成立してゐるのか、当時の貴族社会のどこまで広く流布して

いたのかについても、不詳というよりほかない。彰子のもとで紫式部が采配を振るつたらしい「御草子作り」の場面については、具体的な作品名は記されていないけれども『源氏物語』だつた可能性はきわめて高いと思われる。しかし、この豪華本が、『源氏物語』のどの巻々であるかまではわからない。また、その折、道長が紫式部の局を渉猟して持ち去つたという物語の本についても、それらが『源氏物語』の草稿本だつたとしても、具体的なことはわからない。さらに、紫式部が「よろしう書き換へたりし」という本がどのような運命をたどつたのかについても同様で、早い時期に、物語の原本がいくつのヴァージョンを派生させていたらしいことは推量できるが、そのようなことについても具体的に知ることは不可能である。⁽⁴⁾

『源氏物語』だけでなく、一般に物語というものは、読者たちによつて読み継がれ、書き写されて伝えられていく過程で、意識的にせよ無意識的にせよ、様々な改変がなされて数多のヴァージョンが作り出される宿命から逃れることは出来ないだろう（あくまでも推測である）。また、作者の自筆本つまり原本こそが最も文学的に優れているとも言えまい。結局のところ、今私たちに伝えられてきた写本それぞれの本文に向き合い、できるだけ本文の主観的な改変を控えて愚直に読むほかないと考える。その際、もちろん、自分が今読んでいる物語の本文がどのようなものであるのかということに無自覚であつてはならないけれども。

反省を込めて記すと、私自身もある体験をするまで、本文のありようについてあまり気にすることはなかつた。思い返せば、学生時代は、授業の教科書だった日本古典文学全集（いわゆる『旧全集』）で読むことが、『源氏物語』を読むことだと思つてゐた。そして、同じ小学館から完訳シリーズが出版され、さらに『新全集』が出版されると、依拠するテキストは『新全集』へと代わつた。既に、校本として池田亀鑑が成し遂げた『源氏物語大成』の偉業により、別本を含む様々な本文を見ることができたのだから、自覺的に本文のありようを知ることは

可能なはずだった（現在では、加藤洋介による『源氏物語大成』の増補版と言うべき資料が、データ公開されている⁽⁵⁾）。

もつとも、一九八〇年代頃までの『源氏物語』の教育・研究の場で、多様な本文の状況についての問題意識は、今ほど強くはなかったようにも思い出される。現在では、源光行・親行親子が調えた河内本の系統、そして別本の研究も進み、多様な本文で『源氏物語』を読むことができる状況になっている。これらすべて『源氏物語』として読み継がれてきたのだ。多様な本文の『源氏物語』に親しみつつ読み継いでいくことが可能な時代になつたことを喜ばしいと思う。

私が、このように考えるきっかけとなつた体験についても、一言だけ触れておきたい。

もう随分長い時間が流れてしまつたが、機会があつて、影印複製での『大島本 源氏物語』（財団法人古代学協会・古代学研究所編、角田文衛・室伏信助監修、角川書店、一九九六年五月）を読みながら校訂本文のデータを作成する作業に参加させていただいた⁽⁶⁾。大島本の本文を読解可能な限りは訂正しないという方針は、既に出版された『新大系』と同様であるが、原文への書き入れ（補訂）の扱いをはじめ、段落の作り方や句読点の打ち方、漢字の当て方などを、作業に当つたメンバーと意見交換しながら検討して新たに本文を作成した。翻刻する際には、一定の基準を作つて誤写等の訂正箇所はそれを認定し、青表紙諸本と異なる表現については、大島本の本文のまま読解が可能であれば改めないようにする。十分に検討した上で、どうしても意味が通らないと判断した場合や、脱字や誤記など明らかな誤りとするのが適当と判断した場合は、それぞれ正したものを本文化する。また、語彙の検索や本文の読みやすさに配慮して、仮名に当てる漢字を調整して揃えたり、副詞など仮名にひらく場合は一貫してひらくようにしたりして、表記を整えた。『源氏物語』の総ての言葉をデジタルデータとして検索することまで念頭にした本文作りというのは、これまでにはなかつたことだと思う（この時に校訂した本文は、現在

まだ公表されていない）。

もちろん、現存する写本の中で大島本五三帖が「青表紙本の最善本」だなどと信じているわけではない⁽⁷⁾。同筆一揃いの写本などではなく、おびただしい書き入れなどの訂正は、後から書き入れられたのに相違ないのだが、その経過を判別することは難しい。しかも、それらをすべて取り払つては、「読む」ことがままならぬ写本でもある。複数の人の目と手に触れて、実際に読まれながら補訂されて現在に至つたということだろう。

大島本に限らず、写本を目の前にすると、いきおい、その本を書き写した人々の存在を意識することになる。筆跡は、リアルな身体性を思い起こさせるからだ。本が人の手で書き写されて今に伝わるのだということが実感される（あくまでも主観的な感想である）。室町時代後期に作られたとされる大島本には、複数の人の手で書写された本文に、さらに複数の人々の様々なレベルの書き入れが施されている。この本を読み込んできた人々の所為である。影印複製で大島本を読み始めた頃、そのおびただしい書き入れに果然としたことを思い出す。補入・訂正のしるしがついているものもあるが、そうでないものも多い。墨筆のものも朱筆のものもある。補入による誤写の訂正、見せ消ち、異文注記など本文に関するものや、注釈レベルの、引歌の指摘や物語の読解に関するメモのようなもの、動作や発話の主体を指示するもの、言葉の説明、有職故実の覚書きのようなものまである。朱点を打つたりもしている。貼り紙に記したものまである。柏木巻の末尾の部分など、紙を剥いで継いだとおぼしき箇所まで発見されている。それらは総て、この写本で『源氏物語』を真摯に読もうとした人々の読書行為の跡なのではないか。例えば、書写した本文の傍らに書き込んで一度は訂正を試みたらしい部分を、当人の所為なのか別人の所為なのかはわからないが、さらにまた削つたか胡粉で塗りつぶしたかして消し去り、現在の形状にしたと思しい箇所などもある。それらを見ると、確かに、本文を読む／伝えることへの深い思いが伝わつてくる。書

き入れをしながら読み継いできた見知らぬ読者たちの営みを、読書行為の一環として受け止めたい。

ともかく、大島本とは、そのようにして人々の目と手を経て読み継がれた写本であることは確かだ。このような大島本の形状については既に指摘されているように、当然ながら、どこまで書き入れや訂正などを取り込んで、大島本の本文とするべきなのか、という解決困難な問題もある。書き入れの多くが誤写の訂正であることから、補入・訂正のしるしが付いている箇所を本文として認める立場もあれば、書き入れを一切認めないと、意味不通になる箇所があまりに多く、本文そのものが読めなくなってしまう。だから、そのような「劣化した本文」は注釈の底本にはふさわしくないという意見もある。それも一つの見識である。

私としては、そういう写本なのだという認識を前提としつつ、おびただしい書き入れも含めて〈大島本〉なのだと受け止めるほかないと考える。書写された時点から時を経て、何層にも積み重ねられた読者たちの営みがよって、今に伝えられた「本」である。そういう写本として、『源氏物語』享受史の流れの中に〈大島本〉を位置づけることはできるのではないか。

二 若紫巻・「寄る波の」歌の解釈をめぐって

一つだけ、〈大島本〉本文読解の試みを示しておきたい。他に見られない独自な表現の例として、若紫巻の和歌「寄る波の」歌の場面を取り上げる。じつは、以前にこの本文で解釈可能なのか、という視点で試みた小文がある⁽⁹⁾。本章の内容はその旧稿の一部と重なることを断つておく。ここでは、旧稿に頂いた批判も含めて、歌の解釈の問題について再検討し、私なりの読みのスタンスを確認する。まず、問題となる場面を提示する。

光源氏は、北山の尼君の死後、京の邸にいる紫の君を見舞つた。そして、少納言の乳母から、姫君が父兵部卿の宮のもとに引き取られることになりそと聞かされたので、姫君に対する思いの深さを訴えて、少納言の乳母と歌を詠み合うことになる。なお、この節での『源氏物語』本文の引用は、『大島本 源氏物語』（財團法人古代学協会・古代学研究所編、角田文衛・室伏信助監修、角川書店、一九九六年五月）に拠り、表記は私に改め、問題となる箇所に傍線を引いた。また、便宜上『新大系』で該当する箇所の頁数等を記した。

「何か、かう繰り返し聞こえ知らする心のほどを慎みたまふらむ。その言ふ効なき御心のありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことになむ、心ながら思ひ知られける。なほ、人伝てならで聞こえ知らせばや。

葦わかの浦にみるめは難くともこは立ちながら返る波かは

めざましからむ」とのたまへば、「げにこそ、いとかしこけれ」とて、

「寄る波の心も知らで和歌の浦に玉藻なびかぬほどぞ浮きたる

わりなきこと」と聞こゆるさまの馴れたるに、少し罪許されたまふ。「なぞ越えざらむ」とうち誦したまへるを、身に染みて、若き人々思へり。

（大島本「若紫」巻・四十ウ／四十オ・四六四／四六五頁／『新大系』・一・一八四頁）

この場面で問題となるのは、少納言の乳母が光源氏に返した歌で、「玉藻なびかぬ」の傍線部「ぬ」である。大島本では、紛れもなく「ぬ」と記されているが、青表紙他本では「玉藻なびかん」となっている。『新大系』や、最新の注釈『岩波文庫』でも、底本を校訂して「なびかん」という本文を立てているのは、「なびかぬ」では理解できないという判断をしたものと推察される。言わざもがな、「ん（む）」は、推量の助動詞、「ぬ」は打